.220

特240
355

日英の親善

英・佛・伊・彼等迫ちる獨ソの動向と關係

大内牧多閣下序
辰馬喜閣下序

定價金拾錢
光東閣刊行

特240
355

序

頃日友人數子と會飲した際談會ゝ日蘇關係に及び、遂に日蘇會戰の場合果して我國は日露戰爭のときの如き勝利を再び得るであらうかと云ふ處に落ちて行つた。勿論誰れも斷定的の決論を與へるものがなかつたが、どうも從來のやうに、蘇國の如き鎧袖一觸之をはね飛ばすべしと云ふやうな勢の好い議論よりも、蘇國の實力侮るべからすと云ふ議論が多く、中には蘇國恐るべしとの口吻を漏らすものさへあつた。

蘇國果して與し易いか、侮るべからざるか將又恐るべきか、今玆に論斷しようとするのではないが、軍備に產業に又國內の統一團結に着々改善强化の實を擧げ、革命直後若くは千九百二十年代に比し、所謂吳下の阿蒙でないと丈は明である。而して彼が强きにせよ、弱きにせよ彼が企圖する東方赤化の魔手を排擊し、東洋

帝國圖書館藏

平和の礎石に微動だも與へしめぬ責任は我國の双肩に掛つて居るとは動かすべからざる事實である。

友人富士辰馬君嘗ては操觚者として雋敏よく國民指導の大任を果し、今や官界にありて專ら國際事情の調査を擔任せられ、多年の蘊蓄と正確なる情報獲得の利便とを併備し忙中本書を表はして之を予に示す。

獨蘇兩國の緊張を軸として遠る歐洲國際關係を叙して嚢中に物を探ぐるが如く、吾人の對蘇政策上暗示を得ること尠少にあらず、深く著者の勞を多とす。本書を讀みて感ずる處は、著者の抱懷する我國の對蘇、對獨政策の具體案如何である。著者は現在の職務上遠慮したるか、具體的政綱策立の資料は本書に十分に提供してあるとて態と之を避けたるものであるか、吾人は讀者と共に他日著書が之に對する意見の公表を期待するものである。更に吾人の感を深うするものは、獨逸國民の意氣である。ヴェルサイユ條約の桎梏下に殆んど再起を危ぶまれたる否再起を拒止されたる獨逸が、過大の重荷を負ひつゝ、四面楚歌の中に奮然として荊棘を拓き、桎梏を解き、不屈不撓克く今日の隆運を見、歐洲の中天に復興否新興の意氣を以て四方を睥睨する雄姿に接しては血の沸くを覺えしむるものがある。

何等我等を苦しむる桎梏なく而して遠く極東に在つて常に濁流澎湃たる歐洲國際紛爭の煩累少なき我國民の中に、一二接壤國の强弱に一顰一笑するものあるが如きに至つては果して大和民族の意氣何れにありやと言ひたくなる。此意味に於ても本書は確かに吾人の爲一服の清涼劑であることを確信する。

敢て江湖に推薦する所以である。

昭和十一年十月

陸軍少將　大内收多　識

目次

一、スペイン革命と獨蘇の政策……一
二、トロツキーの指令なるもの……三
三、スターリンを狙つたゲシユタポ派遣員……六
四、宣告文でゲシエタポの關係を暴露す……一二
五、ドイツの兵役期限延長と反ソ宣傳……一五
六、ナチス黨大會の反ソ熱＝ナチスの鬼門……一七
七、ドイツは佛ソ同盟を眼の仇……二一
八、佛ソ戰線に對するドイツの新戰線準備……二六
九、ウクライナ問題とポーランド……二九
一〇、バルチツクを繞るソ獨關係緊迫……三五

＝急迫せる獨ソ關係と英・佛・伊・波の動向＝

全歐洲の戰慄

富士辰馬

一、スペイン革命と獨蘇の政策

一九三三年一月三十一日ヒツドラーを首領とするナチス黨がドイツにおいて政權を獲得してから玆に三年と十ケ月、その間にドイツとソ聯邦の關係は、ナチス以前のそれに逆行し、經濟上にはとに角、政治上には漫性病の昂進する如く惡化の一路を辿つて來たが、本夏スペインに勃發した革命の發展を契機として兩國の關係は沸騰點にまで尖鋭化しつゝある。

ドイツにおいては主として武器の供與と軍艦の派遣によつてスペインに於けるフアツショ叛軍を援助し、ソ聯邦においては主として義捐金・言論・示威運動の動員によつてスペインにお

ける人民戰線政府を援助しつゝあるが、この援助はドイツとソ聯邦がその深刻な對立關係において一國でも多く味方を獲得せんがためである。即ちドイツはスペインにおけるファッショ叛軍を勝たせることによりスペインそのものをソ聯邦に對抗する自國の同盟國となすと共に延いてヨーロッパにおける人民戰線反對勢力を優勢ならしめ以てソ聯邦に對する自國側の陣營を強化せんと熱望して居るに對し、ソ聯邦はスペインにおける人民戰線政府を勝たせることによりスペインをドイツに對抗する自國の同盟國となし同時にヨーロッパにおける反ファッショ勢力を優勢ならしめ以てドイツに對する自國側の陣營を擴大せんと冀求してゐるのである。

而してこのやうな兩國の政策は、本年の八、九月において最も露骨化した。それはソ聯邦において曩に銃殺されたトロツキー・ジノウイエフ派のスターリン、ウオロシーロフ、カガノーウイツチ、オルジョニキーゼ、ジユダノフ、ポストウイシエフ、コシオール等ソ聯黨部、政府巨頭暗殺陰謀にドイツ秘密警察の參加せることを暴露したことゝ、ドイツにおいてニユールンベルグにおける第八回ナチス黨大會席上ナチス外交部長ローゼンベルグ、ドイツ宣傳相ゲツベルス、ヒツトラー總統等が眞ッ向からソ聯攻擊の宣傳放列を敷いたことにおいてクライマクスに達したといはなければならない。

二、トロツキーの指令なるもの

そこで先づ時間上の順序としてトロツキー・ジノウイエフ派事件から說明しよう。嘘にせよ、まことにせよ、或る二國間の國際關係において、民間の言論機關でならともかく、苟も國家機關によつて他國の國家機關が自國の政界巨頭暗殺事件に參與したなどゝいふことを暴露するのは容易ならざることであるが、ソ聯司法當局は敢然としてこれをなしたのである。

ソ聯邦においては既に新聞で報道された如く、一九三四年十二月一日のレニングラード州黨委員書記セルゲイ・キーロフ（スターリンの片腕）暗殺テロ事件の黑幕として一九三五年一月十六日ソ聯邦最高法院軍事裁判により禁錮十年乃至五年の判決言渡を受けてゐた前ソ聯共產黨反幹部派頭目ジノウイエフ、カーメネフを始めとして同派に屬する十六名はその後の檢察審理により海外にあるトロツキーの指金でドイツ秘密警察ゲシユタポの手先と通謀しスターリン、ウオロシーロフ、オルジョキーゼ等ソ聯、黨部、政府の首腦を暗殺せんとする祕密隱謀結社を

組織しその目的遂行を圖つたことが判明したといふので、去る八月二十五日ソ聯最高法院軍事裁判の新判決により銃殺に處せられたが、この事件に關しソ聯邦檢事局及び檢事の豫審終結決定書によると次の如く云ふてゐる

ジノウイエフ（曾てはソ聯共産黨の黨の最高幹部でレニングラード市ソヴエート議長（市長）と第三インタナショナル執行委員會議長を勤めソ聯の内外政策を指導したものである）

カーメネフ（同じく曾ては黨の最高幹部にしてモスクワ市ソヴエート議長たり）

スミルノフ（ソ聯邦内におけるトロツキーの代表）

バカーエフ（ソ聯政界巨頭の暗殺に成功する曉のゲーペーウー長官に擬せられて居り實際暗殺行動を指導した男）

テル・ヴアガニヤン、ムラチコフスキー

等々は權力慾に燃え、黨に對する復讐感に囚はれ、ドイツ・フアッショ秘密警察ゲシュタポの密偵と共にスターリン、ウオロシーロフ、キーロフ、オルジョニキーゼ、カガノーウイツチ、ボストウイシエフ、コシオール（最後の二人はソ聯共産黨ウクライナ探題）を暗殺せんとしてトロツキー・ジノウイエフ・ブロックなる秘密組織を結成し、表面では黨の政策を擁護支持しながら、裏面では同志間で地下深く陰謀工作を進めてゐたのである……。

そして是等「面從脊反の徒」が自供した所に據ると、トロツキーはこの一味に對する海外よりの指令において、どんなことがあつても、マルクス主義者は個人的テロ行動には飽くまで反對だといふ建前に藉口してソ聯邦内のテロ團體とは微塵の關係もないと强辯しなければならぬと固く戒めた上、先づ第一にスターリンとウオロシーロフを『片附け』なければならぬ、さうすれば共産黨内と赤軍内に混亂が起つて、トロツキー、ジノウイエフ、カーメネフに出馬を乞ふであらうと述べ、更にソ聯が外國と戰爭する場合は敗北派の立場を取り（ボリシエウイキ即ち今のソ聯共産黨は歐洲大戰當時露國專制政治を打倒するためには露國が戰敗した方が好いといふ方針を固持した）戰爭における一切の失敗を利用しなければならぬと力説したといふ。

この指令に基きジノウイエフ・カーメネフ一派は、テロ行動實現のため左翼右翼を問はず從來ソ聯共産黨内に發生した幹部反對諸派及び反ソ分子を糾合すると同時に、同じくトロツキー

の指令によりドイツ秘密結社ゲシュタポの密偵と結托し、その援助を藉りて陰謀達成に邁進したものであると。

三、スターリンを狙つたゲシユタポ派遣員

然らばドイツ秘密警察ゲシュタポのソ聯政界巨頭暗殺事件に對する幇助なるものは一體どのやうにして行はれたといふのであるか。その片鱗を示すために去る八月二十日のソ聯最高法院軍事裁判公判記事よりゲシュタポと通謀して三度びソ聯に潜入したと稱せらるる、オルベルグなるものゝ供述を略述しやう。

オルベルグの供述によると、ベルリンにはドイツ・トロツキー團體なる組織があるが、彼は一九二七年から一九二八年にかけてこの團體に加盟してゐた。そして一九三〇年からトロツキーの連絡係としてベルリンに在つたトロツキーの伜セドフと連絡をつけた。この連絡を斡旋したのはドイツ・トロツキー團體の一員で、トロツキーの著書論文をドイツ語で出版してゐたアントン・グリレウイツチなるものである。初めは書面で連絡をつけてゐたが、一九三一年五

月から三二年末まで、ニューレンベルグラツ街のカフエーやセドフの下宿で殆ど毎週會つてゐた。

或る會見でセドフはオルベルグにソ聯邦に入國して仕事をするやうに持出した。これはトロツキーがソ聯の國籍を褫奪されたことに就て秘密のメツセージを出したあとである。このメツセージでトロツキーは初めて『スターリンを片附けなきやいかん』といふ文句でスターリンを暗殺する要があるといふ考へを表明した。

セドフはオルベルグにタイプライターで印刷した件のメツセージを示して『今はこれより、はつきり言へないからね。これは外交上の方式さ』と言つた。そしてセドフはソ聯邦に澤山の人を送らなければならぬが、さし當りオルベルグに行かないかと提議した。セドフは幸ひオルベルグが露語に通じてゐたので、うまく仕遂げるだらうと確信してゐた。

だが旅券のことで困難が起つた。オルベルグは一定の國籍を持つてゐなかつたので査證を受けることが出來なかつた。だがフライデイヒマンといふ名前で旅券を下附され、やがてソ聯邦に發つた。

ソ聯邦に發つ前、彼はセドフと共にコペンハーゲンにゐるトロツキーのとこへ行かうとしたが、うまく行かなかつたので、セドフの妻シュザンナが代つてコペンハーゲンに行つた。シュザンナはセドフに宛てたトロツキーの手紙を持つてコペンハーゲンから歸つて來た。その手紙にはオルベルグのソ聯行きに同意し、オルベルグが使命遂行に成功せんことを期待する旨が書いてあつた。

なほベルリン・トロツキー團體の一員にフリードマンなるものがあり、これもソ聯に派遣された。この男はドイツ警察と連絡があつた。この男に限らず、ベルリン・トロツキー團體とドイツ警察とはトロツキーの同意によりちやんと連絡がついてゐた。それからドイツ秘密警察ゲシュタポと組織上の連絡が始まつたのは一九三三年からである。

オルベルグは三度ソ聯を訪問した。最初は前に述べたフライデイヒマンといふ名儀の旅券を使つて一九三三年三月末に入國し、七月末まで滯在した。旅行の目的はスターリン暗殺の準備と實行であつた。

ソ聯邦に入つてから一ケ月半はモスクワに隠れて居り、それからスタリナバートに行き、そ

こで歴史の教師となつた。だが兵役關係の書類を何にも持つてゐなかつたので、外國へ歸らなければならなくなつて、チエツコ・スロヴアキアのプラーグに行つた。プラーグから書面でセドフに失敗を通知した。するとセドフからきつと好い旅券を取つてやるから落膽するなと言つて來た。

プラーグには彼の弟パウル・オルベルグが居り、ドイツ秘密警察ゲシュタポ派遣員トウカレフスキーと連絡があるので、その援助を藉りてやるからと兄を慰めた。そのトウカレフスキーはチエツコ・スロヴアキア外務省スラヴ圖書課長をしてゐた。弟の紹介でトウカレフスキーと會つてから、オルベルグはパリにあるセドフに書面を寄せて、トウカレフスキーのなした提議を傳へ、トロツキーがトウカレフスキーとオルベルグの協定に同意するかどうか通知して貰ひたいと言ひ送つた。

セドフからは事を嚴秘に附し、トロツキー團體メンバー中の何人にもその協定を洩らしてはならぬと返事して來た。

オルベルグはトウカレフスキーと當時プラーグに來てゐた駐獨ホンヂユラス總領事ルカス・

パラデスを通じて新しい旅券を貰つた。オルベルグはセドフから貰つた一萬三千チェッコ・クローネの金でホンヂュラス總領事からその旅券を買つたのである。

今度はドイツ經由でソ聯邦に行くことゝしたが、發つ前にトウカレフスキーの勸告でゲシュタポ員スロモウイッツ（婦人）と會見した。

オルベルグの留守中ベルリンではトロツキー派のメンバーが少くなつたので、組織を清算するか、ドイツ・ナチスと協定を結ぶか、二つに一つを擇ばなければならなくなつた。この協定はソ聯共產黨及び政府の幹部に對するテロ實行を基礎とするものであつたが、トロツキーはベルリン・トロツキー團體とゲシュタポとの右協定を承諾した。

ベルリン・トロツキー派の見る所に依ると、ソヴエート制度の顚覆とソ聯政府に對する鬪爭は外國からの干涉か、巨頭連に對するテロ行動によるかしなければ考へられないが、キーロフ暗殺の實例によつて見ると、ソ聯邦において黨及び政府の首腦部に對するテロ行動は實行可能である、といふのがスロモウイッツの意見であつた。

スロモウイッツの下宿でオルベルグはゲシュタポ員と會つた。そのゲシュタポ員は、若し援助が必要ならば、スターリンに對するテロ行動の準備についてオルベルグを援助すると言つた。

一九三五年三月オルベルグは二度目にソ聯を訪問した。この旅行も觀光査證で期間が極く短かかつたゝめ、何等の結果も得ず、數日にしてドイツに歸らなければならなかつた。

ベルリン滯在三ケ月再びセドフからもう一度やれといふ指令を受けたので、一九三五年七月三度びソ聯邦を訪問した。

オルベルグはミンスクからゴルキー市に行き、そこでトロツキー派のイエーリンやフエドトフと連絡して、素速くゴルキー高等師範學校に職を得、逮捕されるまでそこに勤めてゐた。

ゴルキー市ではあれやこれやとスターリン暗殺計畫を練つてゐたが、彼の弟パウル・オルベルグ（ゲシュタポ、プラーグ派遣員トウカレフスキーの代理）がソ聯邦に來て彼の仕事を手傳つてゐた。この弟は技師であるし、本當のドイツの旅券や書類を持つてゐたので、兄の身を安定させるのに好都合であつた。

要するに、オルベルグはトロツキーの伴セドフを通じトロツキーの委囑によりスターリン暗

殺の準備と實行のためトロツキーの手先として、ソ聯邦に送られたものである。彼はゴルキー市に來る前にセドフからソ聯邦には地下トロツキー組織があり、それにはスミルノフやムラチコフスキーが加盟して居ることを聞及んでゐたが、ゴルキー市に來るや、同組織のフエドトフから既に戰鬪團が作られてゐるのを知つたので、暗殺計畫を作製し一九三六年五月一日のメーデーにモスクワで計畫を實行することに決定してゐたが、その實行に先立つて逮捕されてしまつたといふのである。

四、宣告文でゲシユタポの關係を暴露す

右は八月二十五日銃殺されたトロツキー・ジノウイエフ一派被告十六名――ジノウイエフ、カメネフ、エウドキーモフ、バカーエフ、ムラチコフスキー、テル・ヴアガニヤン、スミルノフ、ドライツエル、ラインゴルド、ビケル・ゴルツマン、フリツ・ダヴイド、オルベルグ、ベルマン・ユーリン、エム・ルリエ、エヌ・ルリエ ―― 中トロツキーの指令により獨逸からソ聯邦に派遣されたオルベルグ一人の公判廷における供述を略說したものであるが、トロツキーとドイツ秘密警察ゲシユタポとトロツキー・ジノウイエフ派の關係はこのテロ陰謀事件に關するソ聯國家檢事ウイミンスキーの豫審終結決定書にも、公判廷における多數被告の供述にも、檢事の論告にも事細かに指摘されてゐるが、更に八月二十四日ソ聯各紙に發表されたソ聯邦の名を以てせるソ聯最高法院軍事裁判の宣告文にも

『一九三二年十一月ベルマン・ユーリン及びフリツ・ダヴイドはエル・トロツキーによりソヴエート聯邦に差遣されたる處、兩人は出發に先立ちスターリン氏暗殺組織に關しエル・トロツキーにより親しく訓令を受けたり。

同じく一九三二年エル・トロツキーによりテロリスト・ナタン・ルリエはベルリンよりモスクワに差向けられたり。當時外國技術專門家を裝ひてモスクワに滯在中なりしゲシユタポの派遣員にしてヒムラー（現ゲシユタポ長官）の代理人たるフランツ・ワイツと共同してナタン・ルリエはスターリン、ウオロシーロフ、カガノーウイツチ及びオルジヨニキーゼの暗殺を準備せり』とあり

次いで

『一九三五年夏エル・トロツキーによりその息子エル・セドフを通じテロリスト・ウエ・オルベルグはホンヂユラス共和國市民の擬裝旅券を利用してドイツよりソヴエート聯邦に差向けられたり。右旅券はウエ・オルベルグがドイツ秘密警察ゲシュタポの援助により取得せるものにして、オルベルグはエル・トロツキーよりその息子セドフを通じ本件に關しドイツ秘密警察の助力を受くることにつき内諾を得たるものなり』

と二度もドイツ秘密警察の名を擧げ、而もゲシュタポ長官ヒムラーをまづ引合に出して、ソ聯巨頭暗殺事件とゲシュタポの關係を明るみに出してゐるのである。

ドイツ秘密警察ゲシュタポはドイツ・ナチスの三巨頭ヒツトラー、ゲーリング、ゲツベルスの下にあつてこれを維持する支脚の一つで最初は黑襯衣隊と言はれたものである。一九二三年十一月ヒツトラートがミュンヘンにおいて叛旗を飜した時は僅か百人足らずであつたが、一九三三年一月ヒツトラーの政權獲得直前にはその數二萬に達し、最近は五、六萬に增加した模樣である。

この黑襯衣隊はナチス陣營内にあつて、次第に勢力を增大して遂にゲシュタポと稱する國家秘密警察となつたものであるが、その組織中には學生、上層サラリーマン、智的職業の人々など一般に教養ある社會諸層がはいつて居り、ナチス國家の有力な警察力である。今では全國に組織網を擴大し、官廳、工場、街頭、アパート、ナチス黨の細胞などに隈なくその手先を放つて警察權を執行してゐるが、この秘密警察は軍隊と同樣、國内に兵器庫、飛行機、戰車を有し、ソ聯邦のゲーペーウーに劣らざる組織を備へてゐる。この强力な組織を總帥してゐるのが曩に擧げたヒムラーなのである。

五、ドイツの兵役期限延長と反ソ宣傳

トロツキー・ジノウイエフ陰謀事件と關聯してソ聯檢察司法當局が、ドイツ秘密警察の同事件に關係のあることを暴露するや、さなきだに惡氣流に滿たされてゐたソ獨關係は一段と惡化した。

ソ聯最高法院がジノウイエフ・トロツキー一派十六名に銃殺の宣告を下した八月二十四日、ドイツ政府は突如兵役期限を一年より二年に延長する法律を公布した。この法律はドイツ陸海

空軍現役兵員を一躍二倍即ち約百萬となすものである。ドイツがこの新法律を實施したのはソ聯政府がトロツキー・ジノウイエフ事件の公判に先立ち本年八月十一日附を以て義務兵役法を一部改正し徴兵年齢を二十一歳より十九歳に引下げこの新徴兵年齢による徴兵を本年より向ふ四ケ年間に完成する旨の新法令を公布し、以てソ聯赤軍の兵員を激増したことに對する返報でもある。ドイツ新聞は右の兵役期限延長法律實施の動機として一齊に赤化の危險を鳴らし、ソ聯赤軍の脅威を擧げて反ソ宣傳に猛進した。各紙ともドイツ情報局のオデツサ報道としてウクライナに赤軍多數部隊の動搖が起り、農民の饑餓騷擾が擴大して、北カフカズ、クルスク、サラトフ地方にも飛火したと傳へ、更にドン河畔のエランスクなる市においては數百の勞働者農民が食糧ストツク沒收のため來着した赤軍政治委員を襲擊したとか、かゝる騷擾鎭壓のため派遣された軍隊は村ソヴエートぐるみ多數村落の住民を一人殘らず逮捕したとか、食糧の引渡しを拒否する者を逮捕するために一個中隊の兵士が出動したとか、赤軍兵士が機關銃火を開いたとかと只ならぬニュースを掲載した。

ドイツ言論報道機關のこのやうな反ソ一齊射擊には、もちろん、いろ〳〵の意味があるであ

らう。前述した兵役期限一年延長は、さらでもドイツの軍備強化に恐れをなしてゐるフランス、イギリス、ベルギー、チエツコ・スロヴアキア、スキスなどを非常に狼狽させるものであるから、これらの國々に餘計な不安を懷かせたり、ドイツに對する警戒心を強めさせたりして、ドイツを敵視させるやうなことがあつてはならぬといふ對外上の政策もあらうし、對内上の政策としては、今回の兵員倍化を含むドイツの軍備強化施設には倍々一般國民大衆の生活犠牲を要することでもあるから、ソ聯邦が一方に農民の饑餓騷擾すら起しながら他方に猛烈な軍備擴張を強行してゐるといふことを國民大衆に印象せしめれば、民心も決して平穩を缺くやうなことはあるまいといふ考へもあるであらう。

然し前述せるドイツの反ソ宣傳が、ソ聯司法機關及び新聞のトロツキー・ジノウイエフ一派陰謀事件におけるゲシュタポの關係暴露と密接なる聯繫を有することは云ふまでもあるまい。

六、ナチス黨大會の反「ソ」熱＝ナチスの鬼門

右ドイツの反ソ宣傳鬪爭は、ソ聯法廷のゲシュタポ關係暴露から三週間餘を經たニユールン

ベルグに於ける第八回ナチス黨大會に至つて、覆面の宣戰布告と見られるまでに高潮に達した。由來ニユールンベルグのナチス黨大會は毎も數十萬數百萬の黨員を召集するナチス・ドイツの國民動員たる觀を呈する大會であるが、今回の第八回大會においてはナチス黨外交部長ローゼンベルグ、ドイツ宣傳相ゲツベルス、ドイツ總統ヒツトラーといふナチス切つての口舌の雄が壇上に立ちて一齊に砲口をモスクワに向け、ボルシエヴイズムとセミナズムに對して毒舌の砲火を集中した。

一黨の領袖、一國の大臣宰相がこんなにも揃つてこんなにも他國を誹謗痛擊したことは近世史上殆ど例を見ないことであらう。その內容を左に列記しやう（ニユールンベルグ十日發同盟電報による）。先づ九月十日の大會會議席上ナチス黨外交部長ローゼンベルグは『ボルシエウイズムに對する宣戰』を布告して

『ロンドン、パリ、マドリツド、廣東等世界の大都市は今や社會苦に呻吟する男女で充滿し殘忍飽くなきボルシエヴイズムの生贄となつてゐる、玆に於てか一九三六年第八回ナチス黨大會は再びボルシエヴイズムと世界のユダヤ禍に對する果敢な闘爭開始を宣言せざるを得ない。ソヴエート國政を支配する人物の八割九分はユダヤ人であり、主要外交使臣の內ロシヤ人八名、アルメニヤ人三名に對してユダヤ人は十六名に達してゐるが、是等の使臣を睥睨するリトウイノフ外務人民委員はワーラツク・フインケルスタインといふ名の示す通りユダヤ人である。ボルシエヴイズムは人類生活の政治的文化的根柢としての民族感情を否定する。而も彼等が諸外國に向つて宣傳するに當つては各國々別に人種的反感を煽動し現存社會機構の破滅を企圖するのが常套手段である。而も佛ソ兩國、チエツコ・ソヴエート兩國間の軍事同盟に想到せよ、今やソヴエート赤軍は全世界ユダヤ化の旗幟を揭げて兵力を倍加し武裝せるプロレタリア、前科者群を第一線に据ゑ、歐亞兩大陸の諸國を內外から脅威してゐる。世界文化の危機を前に、勇者は敢然起つて偉大な文明と平和とを擁護せねばならない』

云々と獅子吼し、次いでゲツベルス宣傳大臣は同じ題目を捉へて

『今やユダヤ人は歐洲各國の文化を潰滅に導き國際ユダヤ帝國建設のためあらゆる手段と方法とを盡して畫策蠢動してゐる。各國民は今こそ奮起して世界の危機を救濟するためボルシエヴイズムとの闘爭を開始せねばならぬ。ボルシエヴイズムの赤化宣傳は全世界を蔽捲し而

も極めて積極的に各國民の間に矯激な無政府主義を弘布してゐる。彼等は曾てソヴエート・ロシヤに施した所を今スペイン國内に繰返してゐるが、スペイン内亂を推して全歐洲に擴大するのが彼等究極の目的である。ヒツトラー總統は率先ユダヤ禍に對する抗爭の火蓋を切つた。兩極は決して妥協しない。ボルシエヴイズムは軍備の全廢と戰爭の根絶を絶叫するが平時赤軍の總兵力は徴兵年齢の低下によつて二百萬人に引上げられた。而も他に八百萬乃至九百萬の豫備兵力を保有してゐるではないか。戰端一度開かれゝば一千百萬の兵力が立ち所に動員され、更に最大限二千四百萬の赤軍は戰線に津浪の如く殺到しやう。空軍は六千臺に達し内三千百臺は爆撃機である。以上尨大な帝國主義的侵略軍を保有しながら而も口頭平和を提唱する矛盾これより甚だしきはない』云々と絶叫した。

右の兩演説を讀むとナチスのソ聯に對する激昂がどんなものであるかよく判る。餘り激昂して、最も強力な政府の建造に精進するボルシユヴイズムを無政府主義と混同したり、ユダヤ人の中にもボルシエヴイズムを蛇蝎のやうに憎悪する者があるだらうがユダヤ禍とボリシエヴイズム禍を同一視したりするのはどうかと思はれぬでもないが――ソ聯においてトロツキー・ジノウイエフ一味を銃殺に處した翌日の八月二十六日にナチス機關紙フエオキシエル・ペオバヘターはトロツキーの寫眞を掲げ、これに全生涯を革命に捧げた『永久革命家』なる讃辭を與へたが、このトロツキーも八月二十五日ソ聯側で銃殺されたトロツキー・ジノウイエフ派の大立物ジノウイエフ、カーメネフも共にナチスの蛇蝎視するユダヤ人である――要するにナチス巨頭日頃の持論たる『ヨーロツパ文明をボルシエウイズムより擁護せよ』の主張は此處に最高潮に達したのである。

右の演説中でナチス外交部長ローゼンベルグは一段と聲を高めて『而も佛ソ兩國間、チエツコ・ソヴエート兩國間の軍事同盟に想到せよ』と叫んでゐるが、この軍事同盟こそナチス・ドイツにとつて最大の鬼門なのである。

七、ドイツは佛ソ同盟を眼の仇

だから此處にこの軍事同盟に就て數言を費さう。

ドイツ總統ヒツトラーは本年三月七日ロカルノ條約を、その加盟國などには何の相談もなく、

堂々と廢棄して、ライン地方の再武裝に突進した。一九三五年三月十六日のヴェルサイユ條約軍事條項廢棄宣言から發展したこの大膽な行動に對しては八方から抵抗に遭遇すべきことをドイツは前以てチヤンと覺悟してゐたのである。だからドイツは右の行動を執るに當り、佛ソ相互援助條約（ローゼンベルグの言ふ佛ソ軍事同盟）を旺んにこき卸して、これ對獨軍事同盟なり、ロカルノ條約そのものに背反するものなりと力說し、若し佛ソ相互援助條約の成立なかりせば、ドイツと雖もロカルノ條約破棄の擧には出でなかつたかも知れぬとの印象を列國に與へやうと努めた。

此處においてロカルノ條約問題と佛ソ相互援助條約問題とはヨーロツパ政治舞臺において重大な因果關係を持つことになる。

フランス下院は本年二月二十七日の本會議において佛ソ相互援助條約案を最終討論に附し直ちに票決を行ひ、贊成三五三票反對一六四票の大差を以てこれを可決した。次で同條約案は上院において幾度か討論されたが、三月十日當時のフランス首相サローは問題の重要性に鑑みこれを政府信任問題と結びつけて上院の票決に附したところ、贊成二三三票反對五二票の大差を以て上院を通過した。かくて佛ソ相互援助條約は三月二十七日パリにおいて批准交換を濟ましゑ々發効することゝなつた。

右の日附――二月二十七日佛ソ相互援助條約案フランス下院通過＝三月七日ドイツ政府のロカルノ條約廢棄實行＝三月十二日佛ソ相互援助條約フランス上院通過――を見ると、ドイツが如何に佛ソ相互援助條約を煙たがつて居るか、如何にこれを阻止せんとしたかが窺はれる。

ドイツ政府はロカルノ條約廢棄の動機として

一、ドイツの版圖內にある地方に非武裝地帶の存在することは平等の原則と相容れない

二、フランスはソ聯邦との相互援助條約締結によりロカルノ條約を破棄したものである

三、ライン非武裝地帶を撤廢し、ドイツ提案の二十五ケ年間に亘る不侵略條約を締結してこそ始めて西歐に平和を確保することが出來る

との三項を擧げた。去る三月中旬ロンドンに開かれたドイツ問責に關する國際聯盟理事會においてドイツ代表リツベントロツプは右の建前を敷衍して

『ドイツ政府は次の事情を考慮した上の全く正當な政治上の理由によつて右の決定をしたも

のである。

一、フランスの一方的措置はラインランドに關するロカルノ協定を形式内容とも無價値となし同條約を破棄したものである。

二、かくてドイツは新佛ソ同盟に當面し何等猶豫する所なく自國領土安全保障なる最も根原的な國民の權利を行使して之に對抗することを餘儀なくされたのである。

それ故にドイツ政府は一方的にロカルノ條約を廢棄したといふが如き問責を不公正極まるものとして排斥しなければならぬ、ドイツ政府は他の條約參加國の行動により事實上失効したものと見ねばならぬ條約を破棄することが出來やう』と論じた。

これに就てソ聯外務人民委員リトヴイノフは右のロンドン國際聯盟理事會席上自國の立場を闡明して

『ロカルノ條約と佛ソ相互援助條約が兩立しないといふドイツの主張が成立しないことは佛ソ相互援助條約が全く防禦的性質のものであることにより明かである。フランスもソ聯邦もドイツ領土に對し何等領土的要請を持つて居らず、ドイツの國境の變更を冀求してゐない。

この事情は全世界の知る所である。若しドイツがフランスに對してもソ聯邦に對しても侵略をしなければ條約は決して發動されないのである。だが若しソ聯邦がドイツ側よりの攻擊の犠牲となれば、ロカルノ條約は聯盟の一員としてのフランスにソ聯邦を援助する義務を與へるものである』

といひ、更に

『若し世界に如何なる外部からの危險にも脅かされてゐない國があるとすれば、それはドイツである。余はドイツに對し何等か領土的要請を提示するやうな國のあるを知らず、對獨進擊の宣傳を內容とする文獻のあるを知らぬ』

とリツベントロツプの論據を崩壞せしめやうとした。

リツベントロツプはヒツトラーの外交懐ろ刀、リトウイノフは海千山千の口舌的天才。どつちも言ふことが凝つてゐるので、果して佛ソ相互援助條約がドイツの再軍備に刺戟されて成立したものか、そしてドイツのロカルノ條約破棄が佛ソ相互援助條約の脅威下になされたものであるか、容易に斷定し難い。だがそんなことに頓着なくドイツ總統ヒツトラーはロカルノ條約

破棄に關するドイツ問責問題がロンドンで聯盟の饒舌家により論議されてゐる最中（即ち三月十七日）フランクフルトにおいて

『神が人間に與へた自然の生活權及びこの權利を利用する能力は一切の條約條項より高位に立つてゐる。國民とは下らぬ條約などより遙かに永久的なものである。不合理な規定や餘儀なくされた約定はそんなに永く生きるものではない。國民の壽命はそんなものより遙かに永いのだ』

とロンドンの空を眺めて空うそぶいた。

八、佛ソ戰線に對するドイツの新戰線準備

然しドイツによるロカルノ條約の破棄、ドイツ陸軍のライン進駐は何といつてもフランスにとつて大なる脅威となつた。だからフランスは何としても佛ソ相互援助にかぢりついてゐなければならない。それもその筈で、ロカルノ條約締結以後十年間に獨佛間の勢力比率は著しく變更してドイツのために有利となつた。ドイツの軍事潛在能力はフランスの軍事潛在能力より遙

かに大きい。ドイツの人口は六千七百萬もあるのにフランスの人口は四千一百萬に過ぎない。フランスの產業も戰後大いに發展したがドイツの比ではない。ドイツの國民經濟はフランスの國民經濟より遙かに高く遙かに組織的に將來戰爭の要求に適應してゐる。而もドイツ經濟が大戰とインフレーションから受けた甚大な打擊より恢復するに連れ、ドイツはヴェルサイユ條約體制の桎梏下に留まつてゐられなくなつたのである。換言すると、ドイツは植民地と勢力範圍がなく、資本輸出の助けによる商品輸出の可能がなければ生活出來なかつたのである。

フランスはドイツ國民經濟のかゝる變動から必然に生ずべきドイツの對外膨脹が先づ自國に向けられることを怖れてゐるのである。ドイツの對外膨脹が先づフラシスに向けられてゐることはドイツ軍のライン進駐、多數失業者の動員によるライン地方の要塞築造によつて愈々明白となつたので、フランスは如何にしても佛ソ相互援助條約を放すことが出來ず、放さうとしないのである。放さない所か、フランスには共產黨の殆ど完全に支持する人民戰線政府なるものが出來て、一層親ソ政策を固持する形勢が馴致された。

かくて尋常一樣のことでは佛ソ聯繫の箍をゆるめ得ないことを知つたドイツはボルシエウイ

ズムに砲火を集中することにより、人民戰線運動の瀰漫に脅威を感ずる伊・墺・洪・羅等の諸國を糾合して佛・ソ・チェコ戰線に對抗すると共にヨーロッパ政治の中心勢力たるイギリスを自己の陣營に引入れる政策に乘出したのである。

この政策は前述のニュールンベルグにおけるナチス黨第八回大會に際しヒットラー總統が九月十三日夜外國記者團とのインタヴューにおいてなした聲明によく現れてゐる。曰く

『ドイツは隣接諸國にボルシェヴイズムの害毒が蔓延することに無關心たり得ない。余は陸海軍千五百萬の精兵が余の命令一下直ちに蹶起することを信じてゐる。而して一度びドイツ人が起ち上れば、世界空前の光景が展開され、モスクワ政府にとつて好ましからぬ事態が惹起されるであらうといふことを指摘して置きたい。或る者は何故我々がボルシェヴイズム打倒に熱中するかと疑問を懷くかも知れないが、ドイツもイタリーも現在スペインで起つてゐるやうな過程を經て來たので、ボルシェヴイズムの害毒が如何に悲慘な結果を齎らすものであるかを身に泌みて經驗してゐるのである。故にドイツもイタリーも國家主義に立脚する國家に同情を寄せ是等諸國と友交關係を持續せんことを切望してゐる』云々（ニュールンベルグ九月十三日發讀賣電報による）

千五百萬の精兵といへば大變な兵力であるが、この兵力は、恐らく、現在のドイツ版圖以外に住むドイツ人の、乃至更にドイツ人以外の兵力をも念頭に置いて計算したものであらう。

九、ウクライナ問題とポーランド

再興ドイツの膨脹鉾先が西に向ふか東南に向ふか東に向ふか、そしてその何れが先であるかは容易に捕捉し難い。地理上の接離、遠近から言へば、今日の場合、フランス、ベルギー、ポーランド、チェッコ・スロヴアキア、スキスなどに進出するのが順序であらう。

然るに相互に直接接境してゐないソ獨兩國の關係が最も危險な狀態にある外觀を呈してゐる。果してドイツは隣接諸國との衝突に先んじてソ聯と衝突するだらうか。

本年三月一日米國新聞トラスト・スクリツプス・ハワード・ニュースペーパースの代表ロイ・ハワードはソ聯共產黨書記長スターリンと會見して

『ソ聯邦はドイツとポーランドがソ聯邦に對し侵略意圖を有しこれが實現を助くべき軍事協

力を準備してゐることを懸念してゐる。然るにポーランドはその領土を第三國に對する作戰行動の基地として他國軍隊に利用することを許したくないと聲明してゐる。どうしてソ聯邦においてはドイツよりの攻擊を假想してゐるのか」

と質問した。これに對してスターリンは

『何れかの國が隣接國にあらざる他國と交戰せんと欲する時、その國はそれを經て自分の攻擊せんと欲する國の國境まで到達し得るやうな國境を求め始めるものである。これ歷史の語る所にして侵略國は常にかゝる國境を發見する。侵略國は、一九一四年ドイツがフランスを打つためにベルギーへ闖入した時にやつた如く、實力によつてかゝる國境を發見するか、或は一九一八年ドイツがレニングラードに乘込まんとして、ラトヴィアに對してなした如く「信用で」かゝる國境を取得するものである。ドイツが如何なる國境をその目的に適應せしめるかは余の知る所でないが、ドイツに「信用で」國境を供與せんとする希望者は發見され得ると思ふ』

と回答した。

然らばソ聯と衝突の場合ドイツが『實力により』若しくは『信用』によつて取得し得る國境は何處であらうか。それは地圖を見ると明瞭で、南の方から數へると、ルーマニア、ポーランド、リトアニア、ラトヴィア、エストニア、フインランドである。だから獨ソ兩國とも是等諸國に對する政治外交工作には苦心慘憺してゐる。

而してルーマニア、ポーランドと隣接するソ領はいふまでもなくウクライナであり、ウクライナ問題はソ獨關係が云々されるに當つて必ず取扱はれる重要題目となつてゐる。

ドイツがウクライナの分割乃至獨立を熱求してゐることはヒツトラー自身の政權獲得前に書いた『余の鬪爭』なる著書にちやんと書いてあり、これまでソ聯政界巨頭が幾度も好く援用してドイツを批難したところであるが、一九三三年夏にもロンドン國際經濟會議においてドイツ代表フーゲンベルグがウクライナ分割計畫を提出して各國の『驚愕』を買つたことがあり、ドイツは少しも惡びれずにその意圖を公けにしてゐる。

このウクライナは、誰も知る如く、ソ聯邦の重要な穀庫であり、石炭、鐵、マンガンの產地であり、大なる工業地であり、その國民所得はソ聯國民所得總額の二割以上を占め、石炭は全

産額の七割を、麥粉は三割を、砂糖は八割を出して居り、巨大な發電所や工場が此處に集中されてゐる。その面積は四十五萬二千平方キロでソ聯面積の二割二分を占め、その人口は三千二百万でソ聯人口の一割五分に相當してゐる。

この面積、この人口、この物的資源はヨーロッパの二流國家を優に凌駕してゐる。小協商は――その箍は今やだいぶ弛みかけて來たが――ルーマニア、チェッコ・スロヴアキア、ユーゴ・スラヴイアを合して面積七十二萬三千平方キロ、人口四千三百五十七萬をしか構成して居らない。だからウクライ・ソヴエート共和國はこの三國合計に少し劣るのみである。

ドイツはロシヤ革命の直後にウクライナを占領して多大の物資を此の地から自國に供給したことがあるので、ナチスの天下となるや、再びこれに多大の關心を寄せ始めたのである。

『ウクライナがロシヤより分離されることはヨーロッパの最重要問題である』

とはナチス黨外交部長の常に公言する所である。ナチス黨機關誌はこれを敷衍して

『四千萬ウクライナ國民がそれ自身の國家を作らざる限り、東部ヨーロッパは安穩たるを得ない。東部ヨーロッパにおける勢力相互關係にとり決定的意義を有するは東部ヨーロッパに大ロシヤとウクライナを結合した現在の大國家が存在するか、或はかゝる大國家の代りに大ロシヤ、ウクライナ、ポーランドの三國家が別々に存在して、その三國家が互ひに警備し合つてゐるか否かの問題である。ドイツとウクライナとは政治上に相結ばれて居り、經濟上に有無相補足してゐる。若し巨大なツアー帝國の崩壞がドイツのために有益であるといふ考へが正しいとすれば、この考へを飽くまで徹底させて東部ヨーロッパを人種上に分割しなければならない。かくの如く東部ヨーロッパを再分割するにおいて、ポーランド人とウクライナ人は大ロシヤ人に對峙するであらう』

云々とそのウクライナ政策を披瀝した。

而もウクライナはソ聯の諸共和國中民族問題の最も八釜しい所で、過去十數年を通じ陰に陽に幾度か各種各態の分離運動、反ソ運動が起り、ソ聯政府の頭痛に病む所である。

それがため近年はウクライナの共産黨機關及び政府機關要人の肅正に專念し、一意分離運動の擡頭を警戒してゐる。ソ聯共産黨現在のウクライナ探題たるコシオールとポストウイシエフは最も忠實なるスターリン政策の遂行者であるが、右の兩者がトロツキー・ジノウイエフ一派

のテロ對象リストに載つてゐたことはウクライナ問題の國内的及び國際的重要性に鑑み意味頗る深長である。

ウクライナを繞る獨ソ關係に就ては戰略上に重要な位地にあるポーランドの向背を詳述しなければならないが、スペースがないから簡單にその動向變化を瞥見することゝする。

ポーランドは初めドイツのポーランド廻廊回收を警戒してフランスと軍事同盟を結び次いでソ聯邦とも不可侵條約、國境紛爭處理協定などを締んでその安全を保持しやうとしてゐたが、ナチスが出現してドイツが强化するや、フランスとの提携、ソ聯邦との協力を次第に拋棄して一九三四年一月二十六日獨波十ケ年不侵略條約を締結し、ドイツの動勢を他方に向けることによつてその安全を確保せんとする政策に移り、佛ソの提唱せる東歐條約にもドイツと共に反對の態度を固持して來たが、最近ナチスの策動によりダンチツヒが聯盟の管理から蟬脫してドイツと合併するの氣勢を示すや、再び親佛政策に還元せんとする態度を示すに至つた。フランス參謀總長ガメランが八月中旬ポーランド首都ワルソーを訪問しビルスツキー元帥の後繼者にして事實上ポーランドの獨裁官たるリツズ・スミグリ陸軍總監及びモシツキー大統領などと親しく會談し、久しくゆるんでゐた佛波聯繫の紐帶を締め直して再び佛波軍事同盟を回復したとの報道は、東歐政治情勢を觀察する上に看過することの出來ぬ要因である。

一〇、バルチツクを繞るソ獨關係緊迫

獨ソ關係の尖銳化に拍車をかけつゝあるは、ドイツのバルチツク沿岸諸國における活動である。バルチツク沿岸諸國は何れも小國であり我が國から遠く懸け離れてゐる故か、世間も餘り注意しないが、この諸國に對するソ獨の制覇競爭はヨーロッパ政局全體の變動を把握する上に等閑視することの出來ないものがある。

先づバルチツク海そのもの〻情勢から見やう。昨年六月十八日英獨間に海軍協定が締結された。この海軍協定によりドイツはイギリス海軍の三割五分に等しい海軍を建造する權利を得た。この三割五分はイギリス本國の海洋に集中されてゐるイギリス海軍と同等のものであり、ドイツ海軍を四倍するものであつた。

ところがソ聯邦はドイツの海軍四倍增强を以てドイツがバルチツク海に覇權を設定するもの

と見た。これは強ちソ聯の疑心暗鬼のみではない。ドイツのグラディッシュ提督は英獨海軍協定の價値を説明したパンフレットにおいて

『ソ聯邦がバルチック海に優勢な海軍をつくることはドイツにとり由々しき危險であるが、このソ聯海軍をバルチック海、黑海、極東においてソ聯の利益を擁護する三部分に分割しなければならぬことはソ聯をしてバルチックにおける制覇を困難ならしめてゐる。事態の推移によりドイツは必ずやバルチックにおける勢力の中心となるであらう。バルチック沿岸の小海軍國は益々強化するドイツの海軍に支柱を求めるだらう。ポーランドを始めエストニア、フインランド、ラトヴイア、リトアニアの海軍は大した意義を持つてゐないから、ドイツの海上強化に對し大勢を左右するやうな行動を取ることはあるまい。獨波間の親善なる政治關係と露波間の對立は東歐諸隣邦をしてバルチックにおける安定勢力の創設を歡迎せしめるだらう。英獨海軍協定は東歐におけるボルシエヴイズム禍に對する防塞の設置といふことにおいてドイツとイギリスの利益が合致することを示してゐる。ソ聯が東歐にその地歩を强化せんとせば、黑海と極東におけるその地歩は弱化する。これはイギリスの利益に合致し且つ或る程度までフランスにとりロシヤの援助が價値を減少することになる。これまで非バルチック諸國の海軍がバルチックに入れるか入れないかは疑問であつたが、將來のドイツ海軍は戰爭の場合佛ソのバルチック經由連絡を不可能ならしめるだらう』

と指摘した。

かういふ譯であるから同じくバルチック制覇を目指すソ聯はバルチック艦隊に潛水艦のみならず强力な水上艦を持つことに憂身を窶し始めたのである。蓋しドイツ海軍がバルチック海の覇權を確立すれば、沿岸防備の見すぼらしいバルチック諸國は一と堪りもなくドイツの對ソ襲擊基地となるからである。

これと並行してドイツのバルチック諸國に對する政治經濟活動は頓に活潑となり始めた。先づプロシヤには强力なる要塞を築造した。各所に地下格納庫をつくり多數の自動車道路を建造して、これを――即ち東プロシヤ全體――を『バルチック沿岸地帶に至るドイツの橋』となし、メーメル地方においては實權を掌握し、ラトヴイア、エストニアにおいてその少數民族たるドイツ・ユンケルの手を通じて農業・商業・金融・產業に覇權を扶植して兩國のナチス化を圖

り、今やその勢力は牢固たるものがある。

更にドイツのフインランドにおける活動は注目に値する。フインランドはスカンヂナヴイア諸國とバルチツク沿岸諸國の間に介在しソ聯の西北産業地帶と直接接境してゐるので、ドイツはこれを軍事上に高く評價してゐる。從つてその活動も主として軍事上の性質を帶びてゐる。フインランド陸軍には多數のドイツ軍事教官が働いて居り、同陸軍の制服はドイツ陸軍のそれと髣髴たるものがあり、兩國軍事要路の往復は頻繁であるといふ。それにフインランドには數年以來大フインランド運動なる思想運動が起つてゐるが、これはフインランド人とその同族たるエストニア人及び匈牙利人をウラル民族であると稱し、ウラルまでフインランドの國境を延長することを理想とするものであると傳へられる。

かくの如くバルチツク沿岸諸國におけるドイツの勢力は端睨すべからざるものがある。だからナチス領袖がニユールンベルグにおいてボルシエヴイズム禍を絶叫し對ソ十字軍の創設を呼號したとて毫も犬の遠吠えではないのである。

さればソ聯邦においても、スターリンが『ドイツに「信用で」國境を供與せんとする希望者

は發見され得ると思ふ』などゝ言つたり、フインランド國境より黑海に至る西部國境の防備强化に全力を傾倒し始めたのである。

獨ソ關係は、以上略述した如く、はたで見るよりも尖鋭化してゐる。果してこの關係はどうなるか。それは時のみの答へ得ることであり神のみの知ることである。(畢)

339
1053

◇會員募集◇

◇光東閣編纂部は新聞雜誌等にて知り悉し得られぬ時事、時局に關する當面の重要問題に正鵠且つ平易なる解說を加へ、パンフレットとして毎月少くも二回宛刊行頒布します。

◇執筆者は當部の企圖を翼賛する各方面の權威を網羅し、片々たる一小册子もその鍵骨碎身の結晶であるとは同人の矜持するところであります。

◇會員には編纂部より直接新刊パンフレトを御送附致します。(送料當部負擔)、會員御希望の向は住所氏名を明記、會費として一圓以上成るべく振替口座で御送り下さい。會費到着後直に發送し初めます。會費盡きたる時は直に御通知致します。

◇會員にはパンフレット以外の臨時刊行の圖書を實費にて領布致します。

申込所・光東閣內「世界事情研究會」

光東閣パンフレット第二輯
定價拾錢
送料貳錢

昭和十一年十月八日印刷
昭和十一年十月十二日發行

著者 富士辰馬
東京市世田谷區世田谷二丁目千三百九十八番地
發行人 杉山明
東京市芝區西芝浦三丁目二番地
印刷人 川口芳太郎
東京市芝區西芝浦三丁目二番地
印刷所 川口印刷所
東京市世田谷區世田谷二丁目千三百九十八番地
發行所 光東閣
振替口座東京一一七八〇九番

終